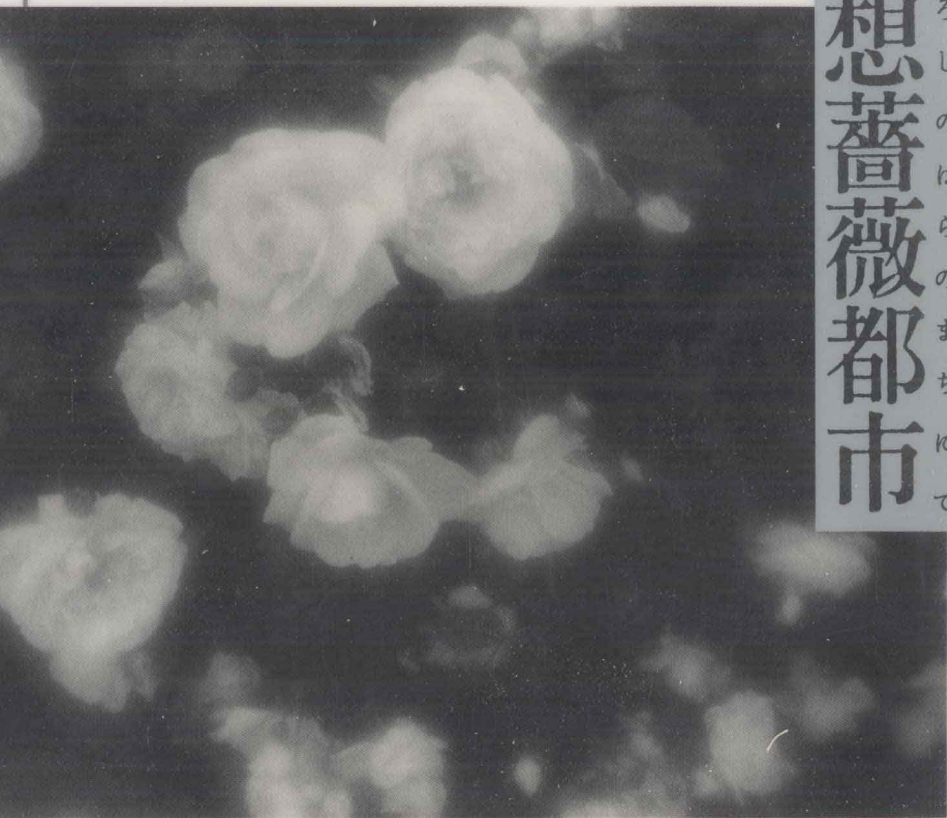


加藤周一

Shuichi Kato

シリーズ
旅の本箱

まぼろしのばらのまちにて
幻想薔薇都市



岩波書店

薔薇都市

加藤周一

Shuichi Kato



岩波書店

幻想薔薇都市

シリーズ旅の本箱

定価 2000 円(本体 1942 円)

1994 年 7 月 7 日 第 1 刷発行

著 者 かとう しゅういち
加藤 周一

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000

印刷・大日本印刷 カバー・半七印刷 製本・松岳社

© Shuichi Kato 1994
ISBN4-00-003834-6

Printed in Japan

目次

歌人 うたひと	<i>Aix-en-Provence</i>	5
対話	<i>Berlin</i>	21
静かな嵐	<i>Paris</i>	41
人形使いの話	<i>Praha</i>	59
I LIKE HER COOKING.	<i>London</i>	75
華麗なポルノまたは……	<i>Bombay</i>	93
いつの日か我らうち勝たん	<i>New York</i>	109

何が彼女をそうさせたのか *Vancouver*

133

小市民的反応について

Peking

151

花の降る夜のなかで

Leningrad

167

どんだろう

Wien

183

地上樂園

Los Angeles

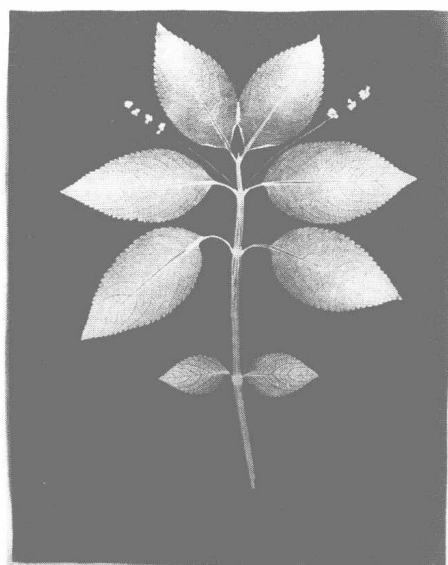
201

雁信

かりのたより

Kyoto

219



幻想薔薇都市

まほろしのばらのまちにて

The apparition of these faces in the crowd;
Petals on a wet, black bough.

— *Ezra Pound*

歌

人

うた
びと

Aix-en-Provence

離陸すると、眼下に地中海が拡^{ひろが}った。その紺青の輝きの彼方に、すべては忽ち遠ざかる。夕陽に染まる白い山、真昼の糸杉、丘の斜面の葡萄畑、ラヴァンドの薫る野原、広場と噴水の町、その町に住む人々……男はそれほど美しい国を見たことがなかった。そこでは思いがけぬことが起り、瞬く間に時が経ち、永く再びその国にもどることはないだろう。音楽にひきこまれて恍惚とした時間が、その曲の最後の和音と共に去ってかえらぬように。ある年の夏眩しい光のなかで出会った人が、その夏の終りに消えて再び二つの生涯の交^{まじわ}ることがないように。その国を離れてゆく旅客機のなかで、男は行先を考えていなかった。その国は遠ざかり、海のなかの小さな島となり、その町は無限に遠い一点となる。と同時に、その町のなかの、行き交う人々のなかの、たったひとりの女は、町よりも大きくなり、野原よりも拡り、男の世界の全体となった。

海のなかに島があり

島には白い町があり

町には多くの人が住み

そのなかの一人に

私が会い

（みどりの木蔭）

矢のように時が去り

（沖から白い波が寄せ）

そのひとに別れて

（私の息はとまり）

時が経つと共に

島は小さくなり

そのひとは大きくなり

海も町も人々も

そのひとのなかに含まれ

男は南仏のエックス・アン・プロヴァンスの小人数の集りで話をした。何の話をしたかは、重要でない。重要なのは、建物が十八世紀で、入口を入った正面に、繊細な細工の鉄の手摺りのある階段が、優美な曲線を描きながら、二階へつづいていたということである。それは夏で、窓を開くと、庭の蟬の声が聞えた。話のあとで、女が近寄って来たときに、男はふと何処かで会ったことのあるひとだという気がした。その感じは、強かったが、たしかにそんなことのあるはずはなかった。小柄で、痩せて、その小さな身体によく合った落ち着いた色の服を着ていた。そういう機会によくあるように男の話の内容に触れることはしないで、思いがけなくも、女の方が巴里^{パリ}で男の噂を聞いたことがあるといった。

「あなたはこの町の生れ？」と男は、いくらか漠然と、いった。

「いいえ、この中学校で教えているだけです。この国を御存知かしら？」

教えているのは英語だということだったが、女はフランス語で話していた。(後になってから、
「もしプロヴァンス語で話すことができたなら、どんなにいいだろう」と半ば冗談のようにいったこともある。)男はその国へはじめて来て、地理も、人情も、むろん言葉も知らなかった。

「それでは私の町の名まえも御存知ないでしょう、ヴァントゥウの山に近いところ……」

「あなたの国を見たいと思う、ローヌの水も、古い町も」と好奇心の強い男は思っていたとおり

のことをいった。

「そうね、ほんとうに美しい国です」と女は素直にいった、「スペクタキュールではないけれど。」

「ぼくは雄大な自然や奇勝奇岩を探さない、北米に十年住んでも、ナイアガラ見物には出かけないでしょう」と男はもう一度いった。

女は週末まで町をはなれることができなかった。男は長い旅の予定を変えて、女の生れた国を訪ねるために、週末までエックスの滞在をのばすことにした。

その町の料亭の露台には、絹の肌触りの微風があった。庭の繁みを透して、街の灯が夜の海のように火のようにきらめくのが見えた。食事の後で、露台の静かな一角の丸い卓をはさみ、男と女は相對しながら、長い間どちらからも立ちあがろうとしなかった。

「人を愛することは、もうないでしょう、あまり苦しいことだから」と女は静かな声でさりげなくいった。

その細い肩から薄い服地の髪が優雅に流れ落ち、話しやめると、口もとには、古風な仏像のように、遠く離れた、しかしあたたかいほほえみが漂った。おそらく女が充分に眺めてきた世の中の有

為転変の、その渦中でのさまざまの情念のすべてを通りぬけた落ち着き、かぎりない一種の優しさ、聡明さと敏感さの重ね合わされたある微妙なものが、そこにあった。男は吸いこまれるようにじつと見つめたまま、どれほどの時が経ったのかわからない。

「お疲れ？　行きましようか」と女がいった。

「いや、いつまでもここにいたい、かぎりなく」と男は我にかえり、少しあわてたように、口走った。

「大げさね。」

それから女は、土地の伝説を語った。昔、美しい貴婦人が、旅人の恋を受け入れるのに、条件を設けた、という。大きな岩山を穿^{うが}つて、泉の噴き出したときに、その恋は叶えられる。そういわれた通り旅人は一心に岩を掘り、貴婦人は待っていたが、どれほど掘っても、まだどれほど待っても、岩から水は湧きださない。とうとう七年の歳月が経った。そして遂に岩山の絶壁から、ヴォークリューズの泉が激流となって噴き出したときに、待ちきれなくなった貴婦人は、もう他の男と結婚していた。その不幸な恋人が、どうなったかは、わからない。それはアレツツオの詩人ペトラルカがヴォークリューズでラウラに会うよりも、はるかに遠い昔の話である……。

男はかぎりなくその話を好み、少し早口の女の語り様を好んだ。またそれ以上に、女が低い声で暗誦するミストラルの、プロヴァンス語の抑揚に、いふべからざる甘美な音楽を聞いた。意味はわ

からなかったし、女の声が甘かったわけではない。しかしそこには、松林の風と透き通った夏の光、また静かな情熱の昂りと、みずからの運命をすすんで引き受ける人の心、——女の、あるいはその国の、つまるところ男にとっては分ち難い一つの魂の、質とでもいうほかないものが、言葉の抑揚と共に、流れてゐた。《Vole qu'en gl'ori fugue aussado/Comme uno rèino, e carressado/Per nosto lengo mespresado,……》

「われらが蔑まれた言葉の愛撫」は、「女王のような栄光」と共にあると、詩人にそういわせずにはおかぬような何ものかが、今は話す人も少いその言葉のなかにはあつて、それは到底フランス語に訳すことができないだろう、と女はいった。

「あなたの故郷は何処？」

「ぼくには故郷がない」と男は応えた。

週末の女は、ひどく陽気であつた。二馬力のシトロエンを操縦し、忽ち町を抜けて、ポプラ並木を通り、丘を昇り、丘を降り、葡萄畑を横切つて、雑木林のなかを走ると、はるかに開けたラヴァンドの花咲く野の道に出た。樹蔭に車をとめると、強い花の匂いは車のなかまで入ってきた。「この畑には、毒蛇がいます」と女は男のおどろきを愉しむように、笑いながらいった。小さいけれど